

大鹿スケッチ

— 第35号 —
 縦走号外! ①
 2013年 9月
 < 発信者 >
 前志満 くみ
 < 提供 >
 旅舎 右馬允

夏山シーズンも終わりを迎えようとしています。日本で最も標高の高い峠、大鹿村三伏峠の紅葉は十月初旬と聞いています。カンバの黄色、ナカマドの燃えるような赤を楽しみに時間をつくって登ってきたいものです。縦走報告がなかなか終わらないので今月は号外でお届けします。

七月の稜線暮らし

聖岳〜光岳編 ③

だらだら読み切り

七月二十一日から三泊四日の日程で聖岳から光岳への縦走を行いました。その記録です。前回からのつづき。



二十三日、光岳のテント場は小屋のすぐ後ろにあり、立て看板には「熊に注意」とあります。三泊中、この日だけは前島以外にテントを張る人の姿が見られませんでした。が、このせい？食料さえ外に出しておかなければ大丈夫。

傘をかぶっている姿に天気が崩れることを確信します。今宵は満月。夜7時頃こそ起きて、空を見上げました。おぼろ月でしたが、これもまた一興。光岳の熊もきつとみあげていたことでしょう。



夕方になると少しガスが晴れてきて今回の縦走ルートがよく見渡せました。山小屋の主人が見えている山を丁寧に説明してくれます。縦走二日目に登頂した上小河内(写真ほぼ中央)は均整のとれたキレイな山です。天気が悪く見通しがきかなかったまでに遠くからの美しい姿は印象に残りました。我々が赤石岳は上小河内の肩のあたりに少し見えています。夕日があたりサンストーンの様なものが見えませんが、この日は見えませんでした。この日は見えませんが、晴れていると駿河湾や夜景も美しく見えます。朽ツは駿河湾界隈だったとことを思い、歴代の祖先も赤石山脈(南アルプス)の恩恵を授かってきたのだなと感じました。東には富士山がうっすらと姿を現しました。

四日目、光岳から上村 易老渡へ下山。朝起きるとあたり一面霧が立ち込めています。雨が落ちてこないうちになんとか下山してしまいたいと思いつつ五時出発。易老渡岳を通り過ぎて九時頃、いよいよポツリポツリと雨が落ちてきました。雨模様だからこそ美しさを感じた。雨模様だからこそ美しさを感じた。雨模様だからこそ美しさを感じた。雨模様だからこそ美しさを感じた。

めました。足を止めて観察し、い蹴散らしていくようです。つつ神秘的な樹林帯を進みまそこらじゅうに赤いバラのす。さて、一八〇〇mくらい花びらが散っているようにまで下ってきたところで雨に散らばっています。フランス濡れていたせいか、靴底が完では高級食材で良いだしが全に取れてしまいました。かとなる貴重なおいしいキノコです。一方だけならまだよかったです。下界に近づけば近づいのですが、しばらくするとくほど雨脚は強まります。やう片方もはがれてしまい、布つとのことで周辺に檜の巨張りだけのつるつるの靴で下木が林立する平坦地にでま山することになってしまった。南アルプスの力強さ、のです。急な斜面がまだまだ神秘性を感じる「面平」に到着途中でのハブニング+雨着です。足元が安定したので不安を感じながらゆっくり少しほっとし、景色を楽しみと下りて行きます。易老渡へながら進むも、最大の難所は、おもいのほか過酷な道の「急坂のジリ」となりました。一度滑ると、「怪我を覚悟で進荷が重いのと、雨で滑りやすみませぬ。面平〜易老渡までのなっているためなかなか止コースタイムでは一時間三まりませぬ。お笑いコントの〇分とありますが、二時間く一場面のように止めどなく大らいかけて易老渡に到着!

胆に転びます。肘など何度骨十時五〇分。そこから二十分折したかとおもったことか。ほどかけて便ガ島まで車を転んでは立ち上がり、転んで取りに行き、無事帰宅。下山は立ち上がりしているうちに怪我をしなかったのが不に、どうも山道は踏み固められ、神に助けられ、体の使い方を考えていて滑りやすい、という教わった三泊四日の有難いことに気が付きました。落稜線暮らしでした。

道を行くことにしました。落稜線暮らしでした。昨年、上村の登山道(便ガ島、易老渡)に通じる県道が通行止めだったので、今年がはられているルートの一つをガサゴソやっていると「キ鮮やかな朱色のため、知らな山を達成させた方も少なくい登山者は毒キノコだとも

い、流される傾向があるようです。かつては、増水期のため「まき道」もあったようですが、使われなくなり今ではその道をたどることは難しいと聞きます。昭和四十年代の小渋川上流付近の写真をみると、今より人の気配が強い印象でしつかりと人が歩くからなのか、整備していたのかわかりませんが里にとても近い感じがしました。今の印象は上流ともなれば賽の河原のようで異次元です。野生の力強さとともに畏敬の念を抱く場所です。さて、本編に入ります。

八月の稜線暮らし
 赤石岳〜聖岳編 ①
 だらだら読み切り

八月も稜線暮らしを試みました。赤石岳の向こう側が気になり八月一九日〜四泊五日の日程で赤石岳から聖岳への縦走を行いました。その記録です。



出発の前日まで赤石岳へは古典ルートといわれる小豊で葉の形と名前を思い出しながら歩きます。そして本日のコース、三伏、鳥帽子、泣きつかれ、やむなく豊口か小河内の稜線を見上げるので三伏、小河内を経由して三合目手前の稜線にたどり着きました。平地になっていて周囲は広葉樹もある気持がよい林です。ザックの中をガサゴソやっていると「キツ、キツ、ツキヤ」と甲高く

初日 八月十九日
 豊口〜高山裏小屋
 朝六時豊口の駐車場を出発。だらだらとしたコンクリート道ですがカエデの種類が豊富で葉の形と名前を思い出しながら歩きます。そして本日のコース、三伏、鳥帽子、泣きつかれ、やむなく豊口か小河内の稜線を見上げるので三伏、小河内を経由して三合目手前の稜線にたどり着きました。平地になっていて周囲は広葉樹もある気持がよい林です。ザックの中をガサゴソやっていると「キツ、キツ、ツキヤ」と甲高く